

敦煌寫本本草と古代日本の本草

——『本草和名』の歴史的意義

丸山裕美子

序言

周知のように、敦煌寫本のなかには、本草・醫書が少なからず含まれている。『新修本草』をはじめとする敦煌寫本本草の研究は、復原研究を中心に100年以上の蓄積を誇る¹。近年も岩本篤志氏によって杏雨書屋所藏『新修本草』序例が中國國家圖書館所藏の斷簡と接續することが指摘された²。こうした敦煌寫本本草、とくに『新修本草』についての新しい研究成果を踏まえつつ、古代日本で編纂された最初の本草である『本草和名』の歴史的意義を考えてみたい。

一、日本における『新修本草』の受容

日本古代における本草知識の受容は、6世紀半ばに朝鮮半島の百濟から採藥師が派遣されたことにはじまる。『日本書紀』欽明15年（554）2月條に、易博士・曆博士・醫博士とともに「採藥師施德潘量豐・固德丁有陀」が交替派遣されている。また『新撰姓氏録』左京諸蕃下によれば、和藥使主の祖智聰は6世紀後半の欽明朝に、「内外典、藥書、明堂圖等、百六十四卷」を持って渡來し、その息子の善那使主は7世紀半ばの孝徳朝に、「本方書（醫書）一百三十卷、明堂圖一、藥白一」をもたらしている。

かつて拙稿で詳述したように、7世紀後半の藤原宮出土木簡には、「本草集注上卷」「本草集注」と記したものと、中國の本草に基づく藥物の荷札・付札木簡、處方木簡を記したものがみられ、7世紀後半には中國の本草（『本草經集注』）に記載

¹敦煌寫本本草についての研究史については、近年岩本篤志『唐代の醫藥書と敦煌文獻』（角川學藝出版、2015年）13～15頁に概略が記されている。他に宮下三郎「敦煌本の本草醫書」（〈講座敦煌5〉『敦煌漢文文獻』大東出版社、1992年）など。

²岩本篤志前掲書第二部「唐朝における醫事制度と本草書——敦煌本『新修本草』の研究」（初出は2005、2007、2008年）。

される薬物を同定し、産地を把握し、徴収する体制がある程度確立していたのである³。薬物名は中国本草の表記が使用され、「委佐俾（ワサビ）」＝山葵、「加良志（カラシ）」＝芥子などの例外はあるものの、原則和名では記されなかった。そして「西辛」＝細辛、「久参」＝苦参と記す例からは、薬物名はあきらかに中国音で読まれていたことが知られる。中国音は、いわゆる呉音で、中国南朝の本草知識を百濟經由で取得していたものとみることができる。

701年の大寶醫疾令の成立によって、薬學教育と薬物徴収体制が確立し、8世紀を通じて『本草經集注』所載薬物の同定が進展したと考えられる。733年撰進『出雲國風土記』所載の草木リストには、本草の記載と同じ表記で多くの植物性薬物が載せられており、『播磨國風土記』『常陸國風土記』にも本草の薬物が記載されている。ただし風土記には、『新修本草』新附の薬物は見えず、基本的に『本草經集注』によって、薬物の同定と産地の把握がなされていたことが推測できる⁴。

一方で8世紀前半には『新修本草』が將來され、『新修本草』新附の薬物の輸入も行われていた。杏雨書屋藏『新修本草』には天平3年（731）7月17日の本奥書がみえ、また正倉院文書の天平20年（748）6月10日付の「寫章疏目錄」にも『新修本草』がみえており、8世紀前半には積極的に書寫されていたことがうかがえる。756年に光明皇太后が東大寺大佛に獻納した60種の薬物のうちには、呵梨勒など『新修本草』新附の薬物が含まれていたし、754年新羅との交易品を記した買新羅物解（鳥毛立女屏風下貼文書）には、その呵梨勒を含め、桂心・麝香・犀角・人參などが見える。国内に産出しない『新修本草』収載薬物を、對外交易によって、新羅から入手していたことがわかるのである。

『新修本草』の日本への將來は8世紀前半であるが、醫疾令に定める正規の本草テキストは、なおしばらく『本草經集注』が使用されており、延暦6年（787）になってようやく、「典藥寮言、蘇敬注新修本草與陶隱居集注本草相檢、增一百餘條、亦今採用草藥既合敬說、請行用之、許焉」（『續日本紀』延暦6年（787）5月戊戌條）として、『新修本草』が公的テキストとして認定されることになる。そして、以後11世紀後半まで、『新修本草』は、本草に関するもっとも主要なテキストの地位を保った。

³丸山裕美子『日本古代の醫療制度』名著刊行會、1998年。

⁴丸山裕美子「延喜典藥式「諸國年料雜藥制」の成立と『出雲國風土記』」（『延喜式研究』25、2009年）。

二、『本草和名』について

『本草和名』（『和名本草』）の名がはじめてみえるのは、930年代に成立した『和名類聚抄』の序文である。「大醫博士深根輔仁奉敕撰集新鈔和名本草」「延喜所撰藥種只一端」とあり、深根輔仁が敕を奉って延喜年間に撰したものだと知られる⁵。

『和名類聚抄』本文での引用は、「和名本草」が4例——蘭、木瓜、樗、莽草（すべて巻20）、「新鈔本草」が5例——鍾乳（巻1）、穞麥（巻17）、文蛤（巻19）、芍藥、蜀漆（以上巻20）の計9例のみであるが、本草関係の和名は多く『本草和名』によった可能性が指摘されている⁶。

984年撰進の『醫心方』巻1「諸藥和名」はほぼ『本草和名』によっており、11世紀後半頃成立の高山寺本『香字抄』や11世紀末から12世紀初成立の圖書寮本『類聚名義抄』などにも引用される。12世紀半ばの『通憲入道藏書目録』には、「一合〈第三十九櫃〉 大觀本草下帙〈十二卷〉、醫書要字二卷〈上下〉、……本草和名下〈一帖〉……」とみえ、上・下の2帖から成っていたことが知られる。12世紀前半頃まで、本草の「和名」として高く評価されていたといえよう。以降は、直接引用する書籍はなく、13世紀後半成立の『本朝書籍目録』に「和名本草〈大醫博士深根輔仁奉敕撰〉」とみえるものの、『本朝書籍目録』は現存しない書籍もあげるので、この頃には使用されなくなっていたものと思われる。

『本草和名』の編者とされる深根輔仁は、『日本紀略』延喜18年（918）9月17日條に「右衛門醫師深根輔仁撰掌中要方」とみえ、延長3年（925）に「權醫博士」（『類聚符宣抄』）であったこと、承平6年（936）には「侍醫」（『法曹類林』）を務めていたことが知られる。

深根氏は、もと蜂田薬師という歸化人系の薬部氏族で、承和元年（834）に深根宿禰を賜った（『續日本後紀』承和元年6月辛丑條）。「薬師」は醫術を世業とした氏族に與えられた姓であるが、天平寶字2年（758）に難波薬師奈良らが難波連への改姓を申請したように（『續日本紀』天平寶字2年4月己巳條）、8世紀後半にはその實質を失っていたと考えられる。とはいえ、傳統的な醫師の家系であったことは注目される。

『和名類聚抄』序文の「大醫博士」というのはやや不審だが、925年に權醫博士であったのだから、『和名類聚抄』の編纂時には「醫博士」であったということかもしれない。『本草和名』の編纂が『和名類聚抄』序文のいうように、延喜年間（901～923）だったとすると、918年に「掌中要方」を撰述した功績が認められて、「權

⁵ 『本草和名』の解題については、〈日本古典全集〉『本草和名』（日本古典全集刊行會、1926年）、川瀨一馬『古辭書の研究』（講談社、1955年）p.70～76などを参照。

⁶ 築島裕「本草和名の和訓について」（『國語學研究』5、1965年）。

醫博士」に任じられ、『本草和名』の編纂を命じられたと考えるのが妥当であろう。

以上を要するに、『本草和名』は、延喜末年頃（920～923年頃）、大醫博士（編纂時は權醫博士か）深根輔仁が奉敕撰集した本草書で、上下2帖から成っていた。『本草和名』は『和名類聚抄』に先んじて「和名」を冠する初例であり、「新鈔本草」「和名本草」とも稱され、本草の「和名」として重用されたが、13世紀には使用されなくなっていた。

三、『本草和名』の諸本

(1) 多紀元簡による『本草和名』の發見とその出版

13世紀以降、散逸したと思われていた『本草和名』であったが、18世紀末になって再びその姿を現す。多紀元簡（1755～1810）が幕府の楓山祕府（紅葉山文庫）に所藏されていた古寫本を見出し、版行したのである。版本の序文には、

叨侍値内班、偶於 祕府書目中、見鈔本本草和名二卷、因請謄録以藏、
初未知何人撰、既而檢其體例、全依唐蘇敬新修之編次、増以諸家食經、
他所徵引、多隋唐以上逸書、方言異稱、層見疊出、有唐慎微・李時珍
所不收者焉

と記されている。「祕府」とは、「御文庫」、すなわち江戸幕府の文庫で、「楓山文庫」「紅葉山文庫」とも稱される。多紀元簡は偶然この『本草和名』寫本を見つけて寫し、所藏したが、「初未知何人撰」とあるように、寫本に選者名は記されていないかった。

多紀元簡は内容を検討し、この『本草和名』が、蘇敬の『新修本草』によっていること、『新修本草』に「諸家食經」を増補していること、隋・唐以前の逸書を多く引用していること、北宋の唐慎微『證類本草』や明の李時珍『本草項目』によっていないこと、などを勘案して、本書が、深江（深根の誤り）輔仁撰の『本草和名』であると考證したのである。「深江輔仁」と誤ったのは、おそらく『本朝書籍目録』に「和名本草〈大醫博士深輔仁奉敕撰〉」とある（中國風に氏名を一字で記したか）ところからの誤解であろう。

こうして多紀元簡は、他の本草書と校合の上、版行したのである。版本の序文の日付は、寛政8年（1796）であるが、初刷は享和2年（1802）8月27日（朱色表紙、和泉屋庄次郎發行）で、後刷（紺色表紙、三都發行）とともに廣く流布した⁷。

⁷初刷が寛政8年ではなく、享和2年であることについては、國會圖書館デジタルコレクション『本草和名』（830-17）の「解題」<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2538099>に詳しい。

現在、一般に普及しているのは、この版本に森立之（1807～1885）・約之（1835～1871）父子が書入れをしたものを複製した日本古典全集本である（活字本は續群書類従 30 下に『輔仁本草』として所収されている）。森父子の書入れには、小島寶素（1797～1849）の書入れも轉寫されている。下冊には、

天保三年（1833）九月三日、伊呂波字類抄參校本、西域直舍燈下朱校、往年餘從屋代弘賢借字類抄、與畏友山本恭庭同校、未就恭庭已泉下人、今再照狩谷望之（掖齋）手校本率巧、併記狩谷氏校語、以示子孫之嗣、是學者江戸小島質（寶素）誌

とあり、小島寶素が、『本草和名』を、屋代弘賢や狩谷掖齋から借りた『伊呂波字類抄』と校訂したことが記されている。また

天保十五年（1844＝弘化元年）七月廿八日、据香藥抄引一校、併及香藥抄裏書、時雨窓畫靜質又誌

ともあり、『香藥抄』と校合しているが、この年7月27日、つまり1日前には、寶素は『新修本草』四を『本草和名』と合わせて校訂している⁸。

なかで、注目されるのは、森立之の書入れに、

安政二年（1855）四月初八日、以躋壽館所藏原鈔本比較竟〈此本影抄楓山御庫舊抄本者〉福山森立之記

とあることである。安政2年に、幕府の醫學校である躋壽館所藏の原鈔本と比較したことが記され、この躋壽館本は「楓山御庫舊抄本」を影寫したものであるという。

躋壽館は、もともと明和2年（1765）に、多紀元簡の祖父である幕府奥醫師多紀元孝が建てた私塾であった。寛政3年（1791）に、幕府が官立とし、醫學館と改稱したが、多紀元簡は父祖の後を繼いで、醫學館を主宰していた。躋壽館本が、多紀元簡が紅葉山本を寫した、版本のもととなった寫本であることは間違いないであろう。

安政2年は、ちょうど半井家本『醫心方』の校訂出版事業が行われていたが、この『醫心方』の校訂出版には、森立之が終始関わって力を盡くしていた⁹。森立之が『醫心方』の校合に使用するために躋壽館本との比較が行われたのであろう¹⁰。

⁸高橋智「森鷗外「小嶋寶素」傳補」（『藝文研究』65、1993年）。

⁹半井家本『醫心方』の傳來とその校訂出版事業については、杉立義一『醫心方の傳來』（思文閣出版、1991年）、『醫心方の研究』（オリエント出版社、1994年）、小曾戸洋『中國醫學古典と日本』（塙書房、1996年）に詳しい。

¹⁰小曾戸洋前掲書は、後述の楊守敬舊藏『本草和名』奥書によって、『醫心方』校訂作業中に紅葉山文庫の原本が醫學館に貸し出され、これを森立之が書寫させたとする（前掲書 570頁）。ただし楊守敬舊藏本奥書の日付は『醫心方』版木が完成した安政6年（1859）の翌年萬延元年（1860）であるので、安政2年時点では、躋壽館（醫學館）の影寫本を用いたものと思われる。

紅葉山文庫や躋壽館（醫學館）の蔵書は、明治維新以降、多くは内閣文庫に引き継がれ、国立公文書館に移管されたが、残念なことに『本草和名』の古寫本は現在所在不明である。

（2）寫本について

現在知られる『本草和名』の寫本は、日本古典籍総合目録データベースによれば、わずかに5點で、そのうち1點（國會圖書館所藏）は版本の寫本、1點（杏雨書屋所藏）は抄出である。残る3點はいずれも19世紀の寫本で、それぞれI岩瀨文庫、II大東急記念文庫、III無窮會神習文庫が所藏する。その他に、IV臺灣故宮博物院に楊守敬舊藏本（故觀 6532・6533）があることが知られている。

IV 楊守敬舊藏本には森立之による以下のような識語がついている¹¹。

右本草和名二冊、楓山祕府所藏二百年前舊鈔、眞天壤間無二之寶典。寛政年間、劉桂山先生（多紀元簡）鏤槧^{るせん}行之。綴學之士、咸被其澤。然已非景刻、時有譌繆、未無遺憾矣。近日躋壽館庠刻醫心方、而今桂山先生之曾孫棠邊先生（多紀元佶）、復以祕府原本校訂其醫心方。於是餘亦得景寫一本、永爲我家之寶用。謄寫者弟子足利人今尾道醇（青山道醇）也。萬延紀元庚申六月下旬比讎一過、併爲之記。華佗術人森立之。

「楓山祕府所藏二百年前舊鈔」を、萬延元年（1860）に森立之が青山道醇に謄寫させ、「我家之寶用」となしたものと知られる。萬延元年六月十六日には『醫心方』校訂版本が正式に出版された。このとき多紀元簡の曾孫で、多紀元堅の子である多紀元佶が、紅葉山文庫の原本（古寫本）を借り出し、これを森立之が影寫させたのであろう。

III 神習文庫本（井上頼國舊藏、9234 井）は、IV 楊守敬舊藏本と同じ識語をもち、IV を寫したものと考えられる。II 大東急記念文庫本（久原文庫）は、文久3年（1863）木村正辭（1827～1913）がIII を寫したものである。つまりII・IIIは、森立之舊藏のIVの轉寫本ということになる¹²。

I 岩瀨文庫本（函 125-70）には識語がない。小島寶素・尚眞の蔵書印である「小島氏圖書記」印と常世長胤（1832～1886）の蔵書印とが押されている。丁子色の表紙で、料紙は雁皮紙、全ての丁に間の補紙が入っている。ごく一部に校訂書入

¹¹臺灣故宮博物院所藏の楊守敬舊藏本とその奥書については、眞柳誠「『本草和名』引用書名索引」（『日本醫史學雜誌』33-3、1987年）、武倩「『本草和名』の諸本に關する一考察—萬延元年影寫本と全集本との關係を中心に」（『訓點語と訓點資料』131、2013年）に詳しい。また奥書は、臺灣故宮博物院のデータベース「善本古籍資料庫」に全文載せられている <http://npmhost.npm.gov.tw/ttscgi/ttswebbrb?@@71F494D1F3E296D0A6C7>。

¹²武倩氏前掲論文參照。

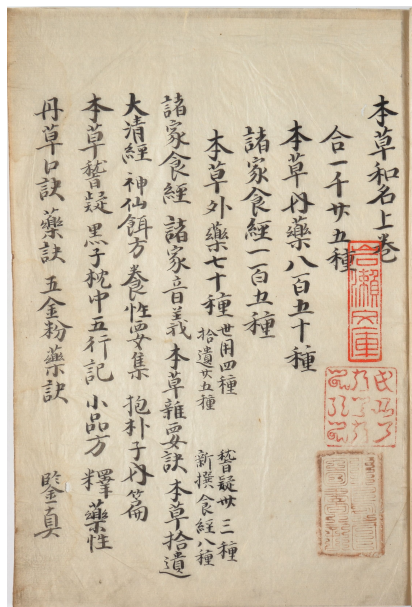
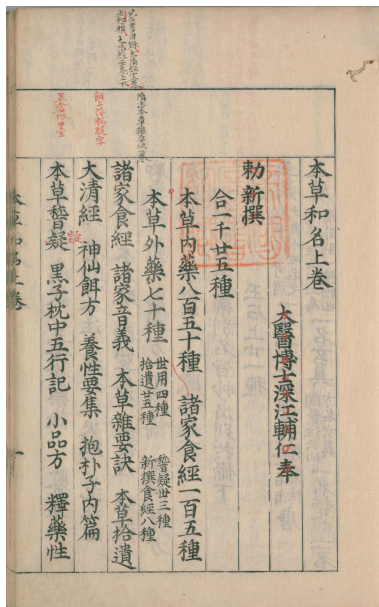
れがあるが、全體として丁寧な影寫本で、識語をのぞいてIVと全く同じ體裁をとる。これはIVとは別に書寫された紅葉山文庫の原本の影寫、または躋壽館本の影寫であると考えられる。國會圖書館藏『本草和名』版本の小島尚眞書入れには、森立之による原抄本校訂の記載がある。おそらく小島尚眞が、森立之と同じ時期またはやや遅れてこれを影寫したものであろう。

以上をまとめると、『本草和名』は、紅葉山文庫に所藏されていた寫本が唯一の古寫本であるが、それは現在、所在不明である。またこれを多紀元簡が影寫したもの（躋壽館＝醫學館所藏？）も所在不明であるが、19世紀後半の影寫本であるIV楊守敬舊藏本（臺灣故宮博物院所藏）とI小島氏舊藏本（岩瀨文庫所藏）とが現存し、これらから古寫本の體裁を知ることができる。

版本への森立之の書入れには、

原本、每半葉九行、無界、欄長八寸弱、幅六寸、每行字數不定

とあるが、IV楊守敬舊藏本、I小島氏舊藏本とも同じ體裁をとる。そして、この二つの寫本には、第一丁冒頭の「大醫博士深江輔仁奉／敕 新撰」がない。それはもちろんないのが正しい。多紀元簡は、版本の序文で「初未知何人撰」と記している。寫本には選者名は記されていないのであり、多紀元簡が「大醫博士深輔仁」の『本草和名』であると考證し、「深根輔仁」を「深江輔仁」と誤って刻し、權威づけのためであろう、「奉敕新撰」の文字を加えて、刊行したのである。



國會圖書館所藏『本草和名』初版（小島尚眞書入れ本）【左】と岩瀨本『本草和名』【右】

選者名の誤りや「奉敕新撰」文言の書き加えも大きな問題であるが、そもそも版本（その活字版である古典全集本）は、多紀元簡による校訂がなされているた

め、『本草和名』原本として扱うことは難がある。夙に指摘されていたことではあるが、今後の『本草和名』研究は、IV 楊守敬舊藏本またはI小島氏舊藏本とに基づいてなされるべきであろう。

四、『本草和名』の構成

I 岩瀬文庫所藏の小島氏舊藏本を使用して、『本草和名』の構成と内容を確認しておこう。

上下2冊で、合せて1025種＝本草内薬850種＋諸家食経105種＋本草外薬70種が収載されている。本文は、「第三卷 玉石上廿一種」から始まり、「第廿卷 有名無用百九十三種」「本草外薬七十種」で終わる。「第三卷」＝巻3から始まっているのは、『新修本草』に依拠しているからである。『新修本草』の巻1・2は序例であり、本文は巻3玉石上から始まる。これはつまり『本草和名』が『新修本草』に全面的に依拠しており、『新修本草』の「和名」という位置づけであったことを意味している。

上册は、巻3玉石上21（実際は26、以下同じ）種、巻4玉石中30種、巻5玉石下30（31）種、巻6草上之上41（40）種、巻7草上之下38（40）種、巻8草中之上37種、巻9草中之下39種、巻10草下之上35（37）種、巻11草下之下67種、巻12木上37（27）種、巻13木中28種で、下册は、巻14木下45種、巻15獸禽69（72）種〈本草56＋食経13〉、巻16蟲魚類113種〈本草72＋食経41〉、巻17菓45種〈本草25＋食経20〉、巻18菜62種〈本草38＋食経24〉、巻19米穀35種〈本草28＋食経7〉、巻20有名無用193種、本草外薬70種〈稽疑33＋新撰食経8＋拾遺25＋世用4〉という構成である。『新修本草』と基本的に同じ構成であり、巻15の獸禽以下には「食経」類からいくつかの薬物を補っている。巻末に『新修本草』などに見えない「本草外薬」を70種掲載する。

引用書として、巻頭に「新撰食経」「諸家食経」「諸家音義」「本草雜要訣」「本草拾遺」「大清経」「神仙餌方」「養生要集」「抱朴子内篇」「本草稽疑」「墨子枕中五行記」「小品方」「釋薬性」「丹草口訣」「薬訣」「五金粉薬訣」「鑑眞」「兼名苑」「崔豹古今注」「耆婆脈経訣」「范汪方」「葛氏方」「本草疏」「陶弘景注」「蘇敬注」「録驗方」「脚氣論」「新方」「廣利方」「刪繁論」「龍門百八方」「新録單方」「千金方」「玄感傳屍方」が列記されているが、それ以上に多くの書籍を引用する。

本草名をあげ、一名（異名）を列挙し、それぞれの異名の出典をあげ、最後に和名を萬葉假名で記す。例えば、「射干」の場合をみてみよう。

射干〈楊玄操云、上音夜、下孝寒反〉 一名烏扇、一名烏蒲、一名烏嬰仁壽、神皇正統記、

一名烏吹、一名草姜、一名鳶尾葉名也、出陶景注、一名鳶頭根名也、出蘇敬注、一名烏喙出難要決、一名烏屨出兼名宛、和名加良須阿布岐からすあふぎ

とある（第十卷「草下之上」）。この場合、「一名鳶頭根名也、出蘇敬注」までが『新修本草』の記す異名ということになる。

周知のように、本草書は、古い本草書をそのまま引用しつつ増補していくかたちで編纂された。『神農本草經』『名醫別録』の段階で、「一名草姜」までが記され、そこに陶弘景の『本草經集注』が「一名鳶尾葉名也」を加え、さらに蘇敬が『新修本草』で、「一名鳶頭根名也」を加えたということになる。

玉石部の藥物＝鑛物性の藥物の場合は、例えば、「雲母」が「出陸奥國」とか、「石鍾乳」が「出備中國」、「水銀」が「出伊勢國」のように産地を掲載するが（以上はいずれも第三卷「玉石上」）、草・木など植物性の藥物の場合は基本的に産地を記載しない。ごく一部、産地ではなく、「植近江國」（第十二卷「木上」の「蔓荊實」）のように、「植○○國」とするものがある。そして国内に産出しないものに関しては、「唐」と記し、和名は載せない。

国内に産出せず、和名もないものも載せているのは、あくまで『新修本草』が基本となっているからである。その上で、最後に『新修本草』や「食經」類に記載がないが、国内で使用されている「本草外藥」を附している。

五、敦煌寫本本草について

ここで『本草和名』の依據した『新修本草』を含め、ほぼ同じ時代に流布していた敦煌寫本の本草についてみておこう。敦煌寫本の本草は、確實なところで、現在までに以下のA～Dの4種が知られている¹³。

A 『本草經集注』

龍 530（甲本）：序例¹⁴

なお、吐魯番出土『本草經集注』としては、Ch1036r（乙本）：卷6？（12行）とその僚本として大谷 5467がある¹⁵

¹³渡邊幸三『本草書の研究』（武田科學振興財團、1987年）、馬繼興『敦煌醫籍考釋』（江西科學技術出版社、1988年）、馬繼興他輯校『敦煌醫藥文獻輯校』（江蘇古籍出版社、1998年）、小曾戸洋前掲書、岩本篤志前掲書など。岡西爲人『本草概説』（創元社、1977年）も参照。

¹⁴龍谷大學佛教文化研究所〈龍谷大學善本叢書16『敦煌寫本 本草集注序録・比丘含注戒本』（法藏館、1997年）に影印・翻刻されている。

¹⁵大谷 5467については、猪飼祥夫「目でみる漢方史料館（241）大谷文書 5467 號の『本草集注』」（『漢方の臨床』55-9、2008年）による。この文獻については、敦煌學國際學術研討會の場で、岩本篤志氏から御教示を得た。

B『新修本草』¹⁶

S.4534 (甲本・甲卷) + S.9434v (戊本／甲本・丙卷) : 卷17部分 (8行+5行)¹⁷

S.4534 (甲本・乙卷) : 卷18末～卷19首 (26行)

P.3714 (乙本) : 卷10部分 (208行)

P.3822 (丙本) : 卷18抄出 (2斷簡、6行+7行=13行)

杏雨書屋 (李盛鐸舊藏、李0229、丁本) + 北京國家圖書館 : 卷1 (序例)¹⁸

C『食療本草』

S.76 : 五代 (10世紀) 書寫、卷子 (139行)

D 亡名氏本草序例

一方、周知のように、日本には『新修本草』の古寫本が傳世している。仁和寺所藏の『新修本草』卷4、5、12、17、19 (國寶) と、杏雨書屋所藏の天平3年 (731) の本奥書をもつ卷15 (重要文化財) であり、両者はいずれも鎌倉時代13世紀頃の書寫とされる。他に現在は所在不明であるが、卷13、14、18、20の古寫本があったことが知られる¹⁹。

このうち、卷15は、『本草和名』の版本が刊行されて30年の後、1833年に至って狩谷掖齋 (1775～1835) によって謄寫され、小島寶素や尾張の淺井紫山に贈られた。翌年には仁和寺本が淺井によって謄寫され、卷13他の寫本は1842年に小島寶素が福井家崇蘭館本を影寫し、これらの轉寫本が各地に流布することになる。

また1889年に清の傅雲龍により上記寫本 (10卷分) と、小島寶素による卷3の復原の11卷分が「纂喜廬叢書」に収録刊行され、これは上海衛生出版社が影印出版 (1957年) している。

¹⁶敦煌寫本『新修本草』を活用した最も早い成果は、岡西爲人『重輯新修本草』 (臺灣國立中國醫藥研究所、1964年、のち學術圖書刊行會、1978年) である。現在のところ、敦煌寫本を活用した『新修本草』全體にわたる復原・活字翻刻としては、尚志鈞『唐・新修本草 輯復本第二版』 (安徽科學技術出版社、2004年) が最も完成度が高い。

¹⁷この二斷簡の接續については、榮新江『敦煌學十八講』 (北京大學出版社、2001年) 及び眞柳誠「大英圖書館所藏の敦煌醫藥文獻 (一)」 (『漢方の臨床』48-7、2001年) で指摘されている。

¹⁸この2斷簡の接續については、岩本篤志前掲書に詳しい。

¹⁹江戸時代後期における、日本傳世古寫本『新修本草』の出現と、その影寫の経緯については、眞柳誠『黃帝醫籍研究』 (汲古書院、2014年) p.357～380に『黃帝内經太素』仁和寺本發見の経緯とともに詳細に調べられていて、参考になる。江戸時代の『新修本草』古寫本の發見が、小島尚眞や森立之による『本草集注』復原の契機となったことはよく知られていよう。なお仁和寺本については、夙に『仁和寺本 新修本草殘卷五册 唐新修本草の解説一册』 (本草圖書刊行會、1936年) があり、そこに載せられた中尾萬三「唐新修本草之解説」から概略が知られる。また幕末の轉寫本である宮内廳書陵部所藏 (花廬家文庫舊藏) の10册本が、解説つきで活字出版されており (〈圖書寮叢刊〉『新修本草殘卷』明治書院、1983年)、参考になる。天平3年の本奥書をもつ杏雨書屋所藏の『新修本草』卷15も、杏雨書屋編『零本新修本草卷第十五』 (武田科學振興財團、2000年) として精巧な複製本が出版され、利用に便となった。

『本草和名』版本の書入れからは、これらの日本傳世『新修本草』寫本が校訂に用いられたことが知られ、また敦煌寫本『新修本草』の校訂にも、傳世本が用いられている。それでは、『本草和名』と敦煌寫本『新修本草』とを比べてみれば、何が見えるだろう？

六、『本草和名』と敦煌寫本『新修本草』

岡西爲人や尚志鈞による『新修本草』の復原は、日本傳世の『新修本草』寫本と敦煌寫本本草により、それらに無い卷については、『千金翼方』及び『大觀本草』『政和本草』などの『證類本草』に基づき、『醫心方』『千金方』などとともに『本草和名』を参考になされている。『本草和名』はあくまで補助的な復原材料なのであるが、先にもふれたように、『本草和名』は『新修本草』の「和名」辭典であり、分類も配列も『新修本草』に據っている。このことを踏まえ、『本草和名』と敦煌寫本『新修本草』、日本傳世の古寫本『新修本草』とを比較してみる。

まず、第四節でみた『本草和名』の「射干」を、『新修本草』P.3714 と比較してみよう。下線部は『本草和名』の記述と對應する部分である。ゴチックは赤字部分である。

射干 味苦、平・微温、有毒。主欬逆上氣、喉痺咽痛、不得消息、散結氣、腹中邪逆、食飲大熱。老血在心肝脾間、欬唾、言語氣臭、散胸中氣。久服令人虛。一名烏扇、一名烏蒲、一名烏翬、一名烏吹、一名草姜。生南陽川谷。生田野、三月三日採根、陰乾。此即是烏翬根。庭壇多種之、黃色。亦療毒腫。方多作〔夜〕干字、今將亦作夜音。乃言其葉是鳶尾、而復有鳶頭、此蓋相似耳、恐非。……謹案、射干此說者是其鳶尾、葉都似射干而花葉碧色、不抽高莖、根似高良薑而肉白、根即鳶頭也。陶說由跋都論此耳也。

細字部分は陶弘景の注で、「謹案」以下が蘇敬『新修本草』の注で、きれいに對應する。

次に表①～③をみてみよう。表①は、敦煌寫本『新修本草』P.3714 とそれに對應する『本草和名』卷10 とを比較したもの、表②は敦煌寫本『新修本草』S.4534 + S.9434 と對應する『本草和名』卷17、及び日本傳世『新修本草』卷17の該當部分とを比較したもの、表③は敦煌寫本『新修本草』S.4534 と對應する『本草和名』卷18～19、及び日本傳世『新修本草』卷18～19の該當部分とを比較したものである。備考欄には、『千金翼方』『證類本草』及び『本草和名』版本との文字の異同を記しておいた。

表からは、『本草和名』と『新修本草』P.3714が一致し、『證類本草』とは文字の異同が多いということが指摘できる。例えば、「亭歴」の場合、『本草和名』と敦煌寫本『新修本草』とは、異名もその配列も一致する。ところが『證類本草』と比較すると、『本草和名』・敦煌寫本『新修本草』の異名「箆」が、『證類本草』は「箆蒿」となっており、また「大室」「大適」が「箆藁」の後ろにあって、配列が異なっている。「旋復花」の場合も『本草和名』と敦煌本『新修本草』は同じ文字を使うが、『證類本草』は「旋覆華」とし、異名の「戴菴」を「戴椹」に作る。「鉤吻」「貫衆」「半夏」でも同様のことが認められる。

一方で、逆に『本草和名』と敦煌本『新修本草』P.3714に異同があり、敦煌本『新修本草』と『證類本草』とが一致する場合も少ないが存在する。例えば、「芫花」の場合、『本草和名』には異名「去水」が載せられていない。版本には書入れがあるが、これは要するに、『本草和名』の寫本が脱落させたものであろう。

次に、『本草和名』版本と岩瀨本（小島氏舊藏本）とが異なり、岩瀨本と『新修本草』P.3714、S.4534が一致する例がある。「牙子」の異名の「狼齒」は、版本には脱落しているが、岩瀨本には敦煌寫本『新修本草』と同じ配列で載せられている。「胡麻」の「巨勝」以下の記載は版本にはないが、『新修本草』は敦煌本・傳世本とも記載がある。これはつまり、版本にはこうした脱落が多いということである。また「胡麻」の異名「巨勝」の位置は、『本草和名』と日本傳世『新修本草』は一致し、敦煌寫本『新修本草』は異なっている。

以上、岩瀨本（小島氏舊藏本）『本草和名』と敦煌寫本『新修本草』及び日本傳世『新修本草』とはよく一致し、『證類本草』とはごくわずかだが異同があることが確認できた。『本草和名』と『新修本草』との強い結びつきがあらためて確認できたといえる。またこれまでも度々指摘されていたことだが、版本『本草和名』には問題があり、敦煌寫本『新修本草』や日本傳世『新修本草』によりつつ、岩瀨本または故宮博物院本を校訂した『本草和名』の翻刻がなされることが必要であると思う。

結語

6世紀以降、百濟經由で南朝の本草を學んだ日本では、藥物を和名ではなく、漢名で同定し、おそらく吳音で呼稱していた。787年に『本草經集注』にかわって律令國家の正規の本草テキストとなった『新修本草』は、その後も11世紀末までは最も重視された本草書であった。この『新修本草』の「和名」辭書が10世紀初めに作られた『本草和名』である。『和名類聚抄』に先行する「和名」を冠するはじ

めての辞書であり、12世紀前半まで用いられた。『大観本草』などいわゆる『證類本草』が日本にもたらされると、直接に對應しない『本草和名』は使用されなくなる。一方で、13世紀後半には『證類本草』にもとづく『本草色葉抄』が新たに編纂される。『本草色葉抄』の序には、

今摭本草之藥名、分色葉之篇目。但用漢音、不用吳音。又有異名者、連其下、略功能而、注其傍。看之者、隨音而易求、討之者、指掌而可知。都廬八卷、名爲本草色葉抄。雖暗螢丹之業、冀決雪玄之疑。于時弘安七年（1284）大族十日。惟宗具俊撰。

とある。『本草色葉抄』は藥名を、「和名」ではなく「漢名」で、そして「吳音」ではなく「漢音」でイロハ順に並べたのである。

日本において本草の藥物は、中國本草の名稱をそのまま「吳音」²⁰で理解する段階（6世紀）から、「和名」でも把握する段階（10世紀）、そして「漢音」で發音し「和名」を必要としない段階（13世紀）へと展開したとみることができる。

（作者は愛知縣立大學日本文化學部教授）

²⁰『本草色葉抄』にいうように、日本の本草藥名には「吳音」と「漢音」とが混在している。これは早い段階で日本に入ってきた藥名が「吳音」で慣習的に讀まれていたためではないかと推測される。ただしこれはあくまで私の推論であり、この問題は今後さらなる檢證が必要である。

表：『本草和名』と敦煌寫本『新修本草』 *ただし『本草和名』の薬の異名は『新修本草』部分に限る

①敦煌寫本『新修本草』P.3714 と對應する『本草和名』卷10 *傳世寫本ナシ

『本草和名』薬名	異名	敦煌寫本『新修本草』P.3714	備考
甘遂	主田、甘藁、陵藁、陵澤、重澤	主田、甘藁、陵藁、凌澤、重澤	
	草甘遂〈出陶景注〉	(陶弘景注) 赤皮者陽、白皮都下亦有、名草甘遂、殊惡…	
	蚤休、重臺〈已上二名出蘇注〉	(蘇敬注) 所謂草甘遂者、乃蚤休也……皮白乃是蚤休、俗名重臺	
亭歷	大室、大適、丁歷、箆	大室、大適、丁歷、箆	『千金翼方』『證類本草』は「箆」の下に「蒿」あり、又「大室」「大適」は「箆藁」の後ろにあり
	公薺〈莖也、出陶景注〉	(陶弘景注) 母即公薺、子細黃至苦……	
芫華	毒魚、牡芫、根名蜀桑根	去水、毒魚、牡芫、其根名蜀桑根	『本草和名』は「去水」ナシ *版本に書入れ
澤漆〈陶景注云摘葉有白汁、故名澤漆〉	漆莖〈大戟苗也〉	漆莖、大戟苗也	
		(陶弘景注) 是大戟苗、生時摘葉有白汁、故名澤漆	
大戟	叩鋸	叩鋸	
菟花			
旋復華	金沸草、盛樞、戴葦	金沸草、盛樞、戴葦	『證類本草』等「旋覆華」、「戴葦」を「戴樞」に作る
鉤吻	野葛、固活	野葛、固活／「秦鉤吻」徐辛、毒根	「秦鉤吻」以下は『千金翼方』『證類本草』他ナシ
	除辛、毒根、毛萇、陰命〈已上四名出陶景注〉	鉤吻是野葛……或云鉤吻是毛萇……又有一物名陰命	
藜蘆	葱苒、葱莢、山葱	葱苒、葱莢、山葱	
赭魁	土卵、黃獨〈出蘇敬注〉	(蘇敬注) 陶所說者、乃土卵尔、不堪藥用。梁・漢人名為黃獨……	
及已			
烏頭〈陶景注云、似烏鳥之頭、故以名之〉	奚毒、即子	奚毒、即子	
	烏喙〈蘇敬注云烏頭兩岐即名烏喙〉	(蘇敬注) 烏喙、即烏頭 名也……如烏頭有兩岐、即名烏喙	
烏喙〈陶景注云似烏鳥口、故以名之〉	射罔〈陶景注云、以八月取汁、日煎為射罔、獺師以傳箭、射完中人殺死〉	(陶弘景注) 名烏喙、喙即鳥之口也。亦以八月採搗搾莖取汁、日煎為射罔、獺人以傳箭射禽獸、中人亦死。	
天雄〈烏喙三寸以上為天雄〉	白幕	白幕 *「烏喙」本文に「長三寸以上為天雄」	
		(陶弘景注) 此(天雄)与烏頭・附子・三種……謂為三建	
附子〈陶景注云、天雄・烏頭・附子為三建〉			
側子			
羊躑躅〈陶景注云、羊誤食躑躅而死、故以名之〉	玉支	玉支	
		(陶弘景注) 羊誤食其葉、躑躅而死、故以為名	
茵芋	茺草、卑共	茺草、卑共	

射干	烏扇、烏蒲、烏翬、烏吹、草姜	烏扇、烏蒲、烏翬、烏吹、草姜	
	鳶尾〈葉名也、出陶景注〉	(陶弘景注) 言其葉是鳶尾	
	鳶頭〈根名也、出蘇敬注〉	(蘇敬注) 根即鳶頭也	
鳶尾	烏	烏園	
貫衆	貫節、貫渠、百頭、帛卷、扁符、伯萍、菓藻	貫節、貫渠、百頭、帛卷、扁符、伯萍、菓藻	『千金翼方』『證類本草』は「鵝」を「鷓」にする
	草鵝頭〈陶景注〉	(陶弘景注) 其根形色芒全似老鵝頭、故呼為草鵝頭	
半夏	地文、水玉、守田、示姑	地文、水玉、守田、示姑	『千金翼方』『證類本草』は「守田」を「地文」の前に置く
由跋			敦煌写本は「由跋根」
帛掌〈陶景注云、四畔有圓可如看帛掌、故以名之〉		(陶弘景注) 四邊有子如帛掌	
萇唐	行唐、橫唐	橫唐、行唐	「行唐」「橫唐」の順序逆
蜀漆菜	恒山苗也	恒山苗也	
恒山	五草、鷄骨恒山	五草、(陶弘景注) 細実黄者、呼為鷄骨恒山	
青箱	子名草决明、草蒿、萋蒿	子名草决明、草蒿、萋蒿	
	崑崙草〈蘇敬注〉	(蘇敬注) 荆襄人名為崑崙草	
牙子	狼牙、狼齒、狼子、犬牙	狼牙、狼齒、狼子、犬牙	「狼齒」版本ナシ、岩瀬本アリ

②敦煌寫本『新修本草』S.4534+S.9434 と對應する『本草和名』卷17、日本傳世『新修本草』

『本草和名』薬名	異名	敦煌写本『新修本草』S.4534+S.9434	日本伝世『新修本草』卷17	備考
櫻桃	朱櫻、胡頹子〈凌冬不凋〉	(陶弘景注) 此即今朱櫻……又胡頹子、陵冬不凋	(陶弘景注) 此即今朱櫻桃……又故頹子、陵冬不彫	
梅実	烏梅、白梅〈相似出陶景注〉	(陶弘景注) 此亦是今烏梅也……生梅子及白梅亦應相似	(陶弘景注) 此亦是今烏梅也……生梅子及白梅亦應相似	

③敦煌寫本『新修本草』S.4534 と對應する『本草和名』卷18~19、日本傳世『新修本草』

『本草和名』薬名	異名	敦煌写本『新修本草』S.4534	日本伝世『新修本草』卷18・19	備考
胡	獨子胡〈出陶景注〉	(陶弘景注) 取其條上子、初種之、成獨子胡	(陶弘景注) 取其條上子、初種之、成獨子胡	
蒜	乱子〈根名也、五患反、出陶景注〉	*該当部分紙欠損	(陶弘景注) 至五月、葉枯、取根、名乱子	
薑汁	薑葵〈出蘇敬注〉	(蘇敬注) 俗謂之薑葵	(蘇敬注) 俗謂之薑葵	「葵」『證類』作「菜」
芸臺				
胡麻〈陶景注曰、本生大宛、故名胡麻〉	狗虱、方茎、鴻臚、巨勝〈黒者名也、巨大也〉、大勝、葉名青囊〈楊玄操音松羊反、已上本條〉	巨勝、狗虱、方茎、鴻臚、葉名青囊	狗虱、方茎、鴻臚、巨勝、葉名青囊	「巨勝」S.4534「狗虱」の前にあり、版本『本草和名』「巨勝」以下ナシ、岩瀬本アリ
		(陶弘景注) 黒者名巨勝。巨者大也、是為大勝。本生大宛、故名胡麻	(陶弘景注) 黒者名巨勝、□者大也、是為大勝。本生大宛、故名胡麻	